

日本に在住する中国人家庭の養育の特徴

—中国本土の家庭、日本人家庭との比較—

教育デザインコース 家政領域 令和元年度修了

肖 欣怡

教育学研究科

園田 菜摘

問題と目的

I. 日本と中国の家庭における子どもの養育

日本と中国は共に東アジア圏に所属している国であるが、両国の家庭における子どもの養育は異なる点が多いことが先行研究で指摘されている。

まず、親の養育態度について、幼児期の子どもの養育を調べた研究（許, 1999）では、「子どもが悪いことをした時でもきつく叱ったことがない」のような子どもを甘やかす項目では、「一人っ子政策」が取られている中国では日本より高く評定することが示されている。また、小学生からの高校生までの子どもの養育を調べた研究（羅, 2006）によると、中国の親ではどの項目においても男子の方が女子より高いことが示されており、日本の親は、全体的には男子に対して「不満」、「非難」、「厳格」、「期待」、「干渉」の得点が高く、女子に対しては「心配」、「溺愛」、「盲従」の得点が高いことが示されている。次に、親の養育意識について、幼児期の子どもについての心配事をたずねた結果、「わがママが強い」と答えた母親の比率では、中国（35%）は日本（22%）より高いことが示されている（田中・照屋, 1998）。以上のように、中国と日本の親の養育態度と意識には違いがあり、中国の親は日本の親に比べると、子どもを甘やかして、男の子を大事にするという特徴があることが示唆されている。

その一方で、中国では、2015年に「一人っ子政策」が「二人っ子政策」に変更され、1組の夫婦に二人の子どもを認める方針が示された（独立行政法人労働政策研究・研修機構, 2016）。この中国の人口政策の転換により、これまで一人の子どもを甘やかすという特徴があった中国人家庭の養育が変化した可能性があるが、2015年以降、日本と中国の家庭で子どもの養育を比較した研究はまだ数少ない。その中でも、2017年に4カ国（日本・中国・インドネ

シア・フィンランド）の家庭で幼児期の子どもの養育を比較した調査（ベネッセ教育総合研究所, 2018）では、いずれの国でも子どもの気持ちに寄り添う養育態度の割合が過保護的な養育態度の割合よりも高いことが示されており、特に中国人家庭に過保護的な特徴があるわけではなかった。このように、中国人家庭の養育が政策の変更により変化した可能性が考えられるため、さらなる検討を行う必要があるだろう。

また、子どもの進学に対する期待について、日本の母親の66.5%は「四年制大学卒業まで」を期待し、「大学院卒業まで」を期待しているのはわずか5.3%であるのに対して、中国の母親で「四年制大学卒業まで」を期待しているのは28.5%で、61.8%の母親は「大学院卒業まで」を期待していることが示されている。このことから、中国の親は日本の親より大学院卒までの高学歴を期待していることが特徴であるといえる。

II. 日本に在住する中国人家庭の養育に関する研究

近年、日本に在住する中国人はますます増加し、2018年時点で在日外国人の27.8%を占め、国別順位で1位となっている（法務省, 2019）。また、日本の学校に在籍する外国人児童生徒の数も増加しており、2018年時点で9万人以上となっている（文部科学省, 2019）。このような背景の下で、日本に在住し育児を行う中国人家庭も増えていると予想される。では、中国人家庭が日本に居住して育児を行う際には、どの程度の文化的影響を受けるのだろうか。これまでの日本に在住する中国人家庭を対象とした研究について、以下で見ていく。

(1) 日本に在住する中国人家庭を対象とした研究

日本に在住する中国人家庭を取り上げ、その特徴を調べ

日本に在住する中国人家庭の養育の特徴

た研究では、日本に在住する中国人家庭の母親の家族からの育児支援について、日本人の夫を持つ中国人の母親は夫及び家族からの家事や子育てへの支援が少ないが、中国人の夫を持つ中国人の母親は、育児の方法、家庭内の生活スタイルが中国と同じで、夫からの支援を多く得ていることが示されている(李・木村・津田, 2015)。別の研究(川崎・麻原 2012)では、日本人の夫を持つ場合、育児は女性のものという夫の役割認識から、育児の問題を夫と共有できないという困難を経験している人がいることが示されている。それに対して、中国人の夫を持つ場合、家事や育児は平等に責任を負うものであるという考え方にに基づき、夫婦で何でも話し合い、家事や育児への協力・サポート体制ができていくことが示されている。このように、日本に在住する中国人家庭の母親にとって、夫が日本人である場合と中国人である場合とでは、育児の協力体制に大きな違いがあることが示されている。

また、日本に在住する中国人家庭の母親に、子どもに将来教育を受けさせたい国を尋ねた研究(楊・江守, 2010)では、最も多いのは「どちらともいえない」(40.2%)で、ついで「日本で」(29.5%)、「中国」(22.6%)、「他の国」(7.6%)の順となっている。このような日本に在住する中国人家庭の子どもの進路に対する考え方は、養育において日本文化の影響をどの程度取り入れようとするかを左右する可能性があるが、この点についてはこれまでほとんど検討されていない。

(2) 日本に在住する中国人家庭と中国本土の家庭、

日本人家庭を比較した研究

日本に在住する中国人家庭の養育がどの程度日本文化の影響を受けるかについて、日本に在住する中国人家庭と中国本土の家庭、日本に在住する中国人家庭と日本人家庭の比較研究が行われている。

まず、中国本土の家庭と比較した研究(林, 2012)では、母親の養育態度について、子ども自身が考えることを促進する養育態度、子どもに教え込みを行う養育態度は、どちらも日本に在住する中国人家庭の母親のほうが中国本土の家庭の母親より少ないことが示されている。また、子どもへの発達期待について、感情を制御すること、身の自立、社会的な能力の発達において、日本に在住する中国人家庭の母親は中国本土の家庭の母親よりも高く、子どもに幼い年齢で獲得することを期待していることが示されて

いる。このように、日本に在住する中国人家庭の母親と中国本土の家庭の母親とでは、養育態度、子どもへの発達期待に違いがあることから、同じ中国人でも、日本に在住する場合、日本文化の影響を受けている可能性が示唆されている。しかし、このような比較研究は少なく、日本人家庭を含めた3者の比較研究は行われていないため、実際に日本文化の影響がどの程度あるのか、解明されていない。さらに、中国本土では2015年に「二人っ子」政策をとり始めたことから、中国本土の養育態度の変化を含めた比較研究を行う必要があるだろう。

一方、日本人母親との比較研究については、在日外国人(ブラジル・中国・韓国)の母親との育児ストレスが比較され(清水, 2002)、育児ストレスが高いのは日本人の母親、日本に住む韓国人、中国人、ブラジル人の母親の順であることが示されている程度である。異文化で暮らす家庭での子どもの養育の特徴を明らかにするためには、さまざまな要因について日本人家庭の特徴と比較する必要があるが、日本人家庭と日本に在住する外国人家庭を比較した研究は非常に少ない。日本に在住する中国人の数がますます増えている中で、家庭での子どもの養育がどの程度日本文化の影響を受けるのかを検討することは、子どもの養育における文化的影響を明らかにする上で重要な問題であると考えられる。

そこで本研究では、日本に在住する中国人家庭と中国本土の家庭、日本人家庭の3群の比較を行うことで、日本に在住する中国人家庭の養育の特徴を明らかにしていくことを目的とする。

方法

I. 調査の対象者

幼児期(1~6歳)の子どもを持つ、「(A)日本に在住する中国人家庭」の家庭の母親、「B中国本土の家庭」の母親、「C日本人家庭」の母親を対象とした。

具体的には、「(A)日本に在住する中国人家庭」の母親については、2019年9月~10月に知人の紹介と中国人が集まるイベントで、東京都、神奈川県、大阪府に在住し、夫婦ともに中国人である家庭の母親に質問紙の配布・回収を行った。配布数は115部、回収部数は62部(回収率は53.9%)であった。なお、質問紙に回答した62名の母親のうち、6名が10代の頃に来日しており、養育に対する意識や態度を形成する段階ですでに日本文化の影響を大きく受けていた

日本に在住する中国人家庭の養育の特徴

と考えられたため、本研究の対象からは省き、20代以降に来日した56名を対象とした。

「(B)中国本土の家庭」の母親については、2019年9月～10月に知人の紹介を通して、上海市、浙江省、湖南省、広東省に在住する母親に質問紙の配布・回収を行った。配布数は70部、回収部数は56部（回収率は80.0%）で、この56名と対象とした。

「(C)日本人家庭」については、2019年9月～10月に神奈川県保育園1園の園児の母親に質問紙の配布・回収を行った。配布数は120部、回収部数は58部（回収率は48.3%）で、この58名と対象とした。

対象の基本的属性については、まず母親の平均年齢は、「(A)日本に在住する中国人家庭」は35.6歳、「(B)中国本土の家庭」は33.5歳、「(C)日本人家庭」は37.0歳だった。母親の学歴は、「(A)日本に在住する中国人家庭」において大卒未満は15名（26.8%）、大卒以上は41名（73.2%）であり、「(B)中国本土の家庭」において大卒未満は33名（56.9%）、大卒以上は25名（43.1%）であり、「(C)日本人家庭」において大卒未満は24名（42.9%）、大卒以上は31名（55.4%）で、不明は1名（1.8%）であった。幼児期の子どもの平均月齢は、「(A)日本に在住する中国人家庭」は48.8ヶ月、「(B)中国本土の家庭」は52.9ヶ月、「(C)日本人家庭」は55.4ヶ月だった。子どもの数については、Table1に示されている通り、「(A)日本に在住する中国人家庭」の57.1%、「(B)中国本土の家庭」の32.1%は2人以上の子どもを持っていた。

Table1 子どもの数

	日本に在住する 中国人家庭 N=56	中国本土の 家庭 N=56	日本人 家庭 N=58
1人	23名 (41.1%)	37名 (66.1%)	11名 (19.0%)
2人以上	32名 (57.1%)	18名 (32.1%)	44名 (75.9%)
不明	1名 (1.8%)	1名 (1.8%)	3名 (5.2%)

II. 質問紙の内容

「(A)日本に在住する中国人家庭」、「(B)中国本土の家庭」、「(C)日本人家庭」の3群に共通する質問として、フェイスシート、養育態度に関する10項目、子ども観・しつけ観に関する10項目、子どもの将来への期待に関する11項目（大人になった時の期待10項目、子どもへの学歴期待1項目）を尋ね、さらに「(A)日本に在住する中国人家庭」には個別

の質問も尋ねた。質問紙の詳細な内容について、以下に示していく。

なお、質問紙では、回答者の現時点の幼児期の子どもの養育に対する考えを把握するため、現在幼児期（1～6歳）の子どもを念頭において回答してもらった。また、幼児期の子どもが複数いる場合は、回答の一貫性と利便性を考慮し、研究対象となる一番年長の子どもについて回答してもらった。

III. 倫理的配慮

アンケート実施の保育園の責任者およびイベントの主催者に対して、研究計画書、アンケート用紙を用いて研究の目的・実施方法、調査内容、倫理上の配慮に関する説明を行い、アンケート協力の承諾を得た。被調査者に向けては、質問紙の表紙に調査の目的、個人情報の保護、本人の自由意志により調査参加であり、研究参加を拒否できること、研究不参加による不利益が生じることがないこと、得られたデータはすべて統計的に扱われ個人が特定されることはないことについて説明し、アンケートへの回答をもって同意確認とした。

(1) 養育態度

養育態度については、ベネッセ教育総合研究所（2018）の幼児期の家庭教育国際調査の中から、「寄り添い型養育態度」と「保護型養育態度」の10項目を全て採用した（Table2）。回答は「よくあてはまる」「だいたいあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4段階で評定してもらった。さらに本研究では、「寄り添い型養育態度」5項目を合計して「寄り添い型養育態度」得点（ $\alpha = .744$ ）、「保護型養育態度」5項目を合計して「保護型養育態度」得点（ $\alpha = .754$ ）とした。

(2) しつけ観・子ども観

しつけ観・子ども観については、林（2012）が用いた11項目のうち、日本人には馴染みのない価値観の1項目「棍棒底下出孝子」は有道理的（“打って育てると孝子となる”のは道理がある）を省き、10項目を採用した。回答は「とても賛成」「賛成」「反対」「とても反対」の4段階で評定してもらった。因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったところ、2つの因子が抽出され（Table3）、第1因子を「権威的しつけ観」、第2因子を「道理的しつけ観」と命名し、それぞれの因子得点を用いて以降の分析を行った。

日本に在住する中国家庭の養育の特徴

Table2 養育態度の質問項目

尺度名と項目内容	
＜寄り添い型養育態度＞	
1	子どもがやりたいことを尊重し、支援している
2	子どもに対して否定的ではなく、前向きで積極的な態度をとるように心がけている
4	叱るとき、子どもの言い分を聞くようにしている
6	子どもが自分でやろうとしているとき、手を出さずに最後までやらせるようにしている
10	どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている
＜保護型養育態度＞	
3	子どもに対して過保護である
5	子どもを私に頼らせようとしている
7	子どものことを、年齢より幼く扱うことが多い
8	私と一緒にいてあげないと、子どもは自分のことができないのではないかと心配になる
9	子どもがしようとしていることすべてにわたってコントロールしようとしてしまう

Table3 子ども観・しつけ観の因子分析の結果

項目	成分負荷量	
	第1因子	第2因子
第1因子「権威的しつけ観」		
8 世の中に間違っている親はいない	.68	.00
9 子どもに道徳を教えることは、国や、教育、教師の責任が最も大きい	.67	.04
1 成績が良ければ、家事など手伝わなくてもよい	.54	-.12
10 どちらかというと、よくしゃべる子より、静かな子のほうが好ましい	.47	.07
3 歌や踊りが上手な子より、勉強が好きで将来見込みがある子	.36	.07
第2因子「道理的しつけ観」		
2 子どもの健康は、学業（勉強）より大切だ	-.01	.72
5 厳しいしつけは、子どもの個性の発達に害を与える	.18	.42
4 子どもに「正しい人間になること」を教えるのは、勉強を教えることよりも大切だ	-.18	.32
累積寄与率	20.91%	30.27%

(3) 子どもの将来への期待

子どもの将来への期待については、子どもが大人になった時の期待と学歴に対する期待の2つを尋ねた。

① 大人になった時の期待

大人になった時の期待については、楊・李 (1998) の「子どもの将来の生き方に対する親の期待」の10項目を全て採

用した (Table4)。回答は「強く希望する」「まあまあ希望する」「それほど希望しない」「全く希望しない」の4段階評定として、各項目の得点を以降の分析で用いた。

Table4 大人になった時の期待の質問項目

1	趣味を持ち、楽しく生きる
2	自分の命を大切に生きる
3	お年寄りを大事にする
4	仕事にやりがいを感じる
5	親孝行をする
6	貧しい人や困った人に尽くす
7	経済的に豊かになる
8	神仏を大切ににする
9	仕事より家庭を大切ににする
10	国のために尽くす

② 学歴期待

学歴期待について、母親が子どもに期待する最終学歴を尋ねた (Table 5)。

Table5 子どもの最終学歴に対する母親の期待

最終学歴	日本に在住する中国家庭 N=56	中国本土の家庭 N=56	日本人家庭 N=58
中学校卒	0名 (0.0%)	0名 (0.0%)	7名 (12.1%)
高校若しくはこれに準ずる学校卒	0名 (0.0%)	0名 (0.0%)	0名 (0.0%)
専門学校卒 (日本のみ)	1名 (1.8%)		0名 (0.0%)
短大卒 (日本のみ)	0名 (0.0%)		0名 (0.0%)
専科大学卒 (中国のみ)	0名 (0.0%)	0名 (0.0%)	
大学卒	23名 (41.1%)	28名 (50.0%)	46名 (79.3%)
大学院卒	23名 (41.1%)	28名 (50.0%)	2名 (3.4%)
不明	9名 (16.1%)	0名 (0.0%)	3名 (5.1%)

(4) 日本に在住する中国家庭への個別の質問

日本に在住する中国家庭には、3群に共通する質問以外に、母親の在日年数、中国との行き来の回数と日数、子どもに望んでいる最終学歴を取得する国、子どもに望んでいる就職先の国を尋ねた。

平均在日年数と年間の一時帰国の日数については、母親の平均在日年数は9.6年で、年間の一時帰国の日数について、「30日未満」は31名 (55.4%)、「30日以上」は18

日本に在住する中国人家庭の養育の特徴

名 (32.1%)、不明は8名 (12.5%) であった。

また、子どもに望んでいる最終学歴の取得国は「日本」51.8%、「中国」12.5%、「その他」35.7%であった。子どもに望んでいる就職先の国は、「日本」23.2%で、「中国」19.6%で、「その他」57.2%であった。

結果

I. 日本に在住する中国人家庭への個別の質問と分析

日本に在住する中国人家庭においては、子どもの最終学歴や就職先として日本を考えているか中国を考えているかによって、子どもの養育に対する日本文化の受け入れ方が異なる可能性があることから、望んでいる国によって養育態度、子ども観・しつけ観、子どもの将来への期待の各尺度の得点に違いがあるかを分析した。その結果、子どもに望んでいる最終学歴の取得国による「子どもの将来の期待」においてのみ違いが示され、「趣味を持ち、楽しく生きる」(t=2.17, p<.05)、「貧しい人や困った人に尽くす」(t=4.21, p<.001)、「経済的に豊かになる」(t=2.18, p<.05) ことへの期待が、「日本」を望んでいる母親の方が「中国」を望んでいる母親よりも高いことが示された。

II. 日本に在住する中国人家庭、中国本土の家庭、日本人家庭の3群の比較分析

次に、日本に在住する中国人家庭の養育の特徴を明らかにするために、養育態度、しつけ観・子ども観、子どもの将来の期待それぞれについて、中国本土の家庭、日本人家庭との比較を行った。

(1) 養育態度

「養育態度」の「寄り添い型養育態度」「保護型養育態度」それぞれにおいて、「(A) 日本に在住する中国人家庭」、「(B) 中国本土の家庭」、「(C) 日本人家庭」の3群に違いがあるかを検討するために、分散分析を行った。その結果、どちらの尺度においても3群間で有意差は示されなかった。

(2) しつけ観・子ども観

「しつけ観・子ども観」において、「(A) 日本に在住する中国人家庭」、「(B) 中国本土の家庭」、「(C) 日本人家庭」の3群に違いがあるかを検討するために、分散分析を行った。その結果(Table6)、「権威的しつけ観」において有意差が示されたため、下位検定(Bonferroni法)を行ったところ、「(A) 日本に在住する中国人家庭」と「(C) 日本人家庭」は子どもに権威的なしつけを行うことが「(B) 中国本土の家庭」より低いことが示された。

Table6 3群によるしつけ観・子ども観の分散分析結果

項目	日本に在住する中国人家庭 N=56	中国本土の家庭 N=56	日本人家庭 N=58	F 値
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	
権威的しつけ観	-.32(.72)	.54(1.02)	-.19(.51)	17.97***
道理的しつけ観	-.02(.84)	-.12(.68)	.15(.83)	1.98

***p<.001

(3) 子どもの将来への期待

子どもの将来への期待については、「大人になった時の期待」と「学歴期待」の分析を行った。

① 大人になった時の期待

子どもが「大人になった時の期待」の各項目について、「(A) 日本に在住する中国人家庭」、「(B) 中国本土の家庭」、「(C) 日本人家庭」の3群に違いがあるかを検討するために、分散分析を行った。その結果 (Table7)、「お年寄りを大事にする」、「親孝行をする」、「貧しい人や困った人に尽くす」、「仕事より家庭を大切にする」ことへの期待において、

「(A) 日本に在住する中国人家庭」と「(B) 中国本土の家庭」はどちらも「(C) 日本人家庭」よりも期待が高いことが示された。一方、「国のため尽くす」ことへの期待においては、「(A) 日本に在住する中国人家庭」と「(C) 日本人家庭」はどちらも「(B) 中国本土の家庭」より期待が低いことが示された。また、「仕事にやりがいを感じる」、「経済的に豊かになる」、「神仏を大切にすること」への期待においては、「(A) 日本に在住する中国人家庭」は「(C) 日本人家庭」より期待が高いことが示されたが、「(B) 中国本土の家庭」とは有意差が示されなかった。

日本に在住する中国家庭の養育の特徴

Table7 3群による子どもが大人になった時の期待の分散分析結果

項目	A 日本に在住する 中国家庭 N=56	B 中国本土の家庭 N=56	C 日本人家庭 N=58	F 値	
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)		
1. 趣味を持ち、楽しく生きる	3.84(.50)	3.63(.59)	3.66(.58)	2.34 [†]	
2. 自分の命を大切に生きる	3.86(.49)	3.86(.48)	3.98(.13)	1.78	
3. お年寄りを大事にする	3.76(.55)	3.73(.59)	3.45(.57)	5.24 ^{**}	A, B > C
4. 仕事にやりがいを感じる	3.76(.55)	3.57(.66)	3.33(.60)	7.12 ^{**}	A > C
5. 親孝行をする	3.53(.73)	3.71(.59)	2.74(.87)	27.55 ^{***}	A, B > C
6. 貧しい人や困った人に尽くす	3.55(.67)	3.49(.64)	2.78(.73)	22.47 ^{***}	A, B > C
7. 経済的に豊かになる	3.47(.70)	3.36(.62)	3.17(.57)	3.16 [*]	A > C
8. 神仏を大切にする	2.60(1.05)	2.32(.96)	2.10(.74)	3.93 [*]	A > C
9. 仕事より家庭を大切にする	3.35(.69)	3.39(.65)	2.88(.62)	10.61 ^{***}	A, B > C
10. 国のため尽くす	2.14(1.10)	3.13(.79)	1.81(.66)	38.91 ^{***}	A, C < B

[†]p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

② 学歴期待

「学歴期待」では、「大学卒未満」「大学卒」「大学院卒以上」の3群に分け、それぞれを選んだ割合に違いがあるか、 χ^2 検定を用いて検討を行った。

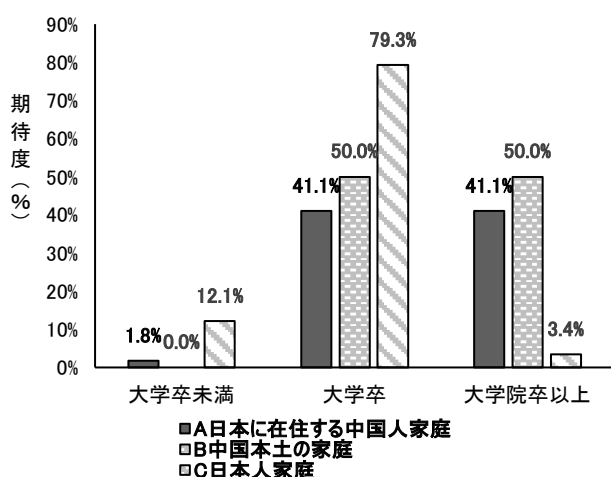


Figure1 3群の子どもへの学歴期待(%)

その結果(Figure1)、有意差が示され ($\chi^2=39.33$, $p<.001$)、「大学卒」を選んだ母親の割合は、「(A)日本に在住する中国家庭」と「(B)中国本土の家庭」はどちらも「(C)日本人家庭」より少なく ($p<.05$)、「大学院卒」を選んだ母親の割合は、「(A)日本に在住する中国家庭」と「(B)中国本土の家庭」はどちらも「(C)日本人家庭」より多かった ($p<.05$)。

なお、母親の学歴の違いによる子どもへの学歴期待の違いについてカイ二乗検定で検討したところ、「(B)中国本土の家庭」において違いが示され、大卒以上の学歴を持つ母親 (65.4%)の方が大卒未満の学歴の母親(39.4%)よりも、子ども「(B)中国本土の家庭」より低かった)。このことから、日本

もに「大学院卒」の学歴を期待する割合が高かった ($\chi^2=3.931$, $p<.05$)。

考察

本研究では、日本に在住する中国家庭の子どもへの養育における文化的影響を明らかにするために、日本に在住する中国家庭、中国本土の家庭、日本人家庭の3群において、養育態度、子ども観・しつけ観、子どもの将来への期待の違いがあるかを比較した。

まず本研究では、日本に在住する中国家庭において、子どもの最終学歴や就職先として日本を考えているか中国を考えているかによって、子どもの養育に対する日本文化の受け入れ方が異なる可能性があると考え、両者の養育態度、しつけ観・子ども観、子どもの将来への期待の違いについて分析を行った。その結果、最終学歴の取得国による子どもの将来への期待の「大人になった時の期待」にのみ違いが示され、「趣味を持ち、楽しく生きる」、「貧しい人や困った人に尽くす」、「経済的に豊かになる」ことへの期待は、最終学歴取得国として「日本」を望んでいる母親の方が「中国」を望んでいる母親よりも高いことが示された。一方、この3項目は、「(A)日本に在住する中国家庭」、「(B)中国本土の家庭」、「(C)日本人家庭」の3群の比較において、日本人家庭の方が中国家庭よりも高い項目であるという結果は示されなかった(「趣味を持ち、楽しく生きる」、「経済的に豊かになる」ことへの期待は、「(C)日本人家庭」と「(B)中国本土の家庭」の間での有意差が見られず、「貧しい人や困った人に尽くす」ことへの期待は、「(C)日本人家庭」は日本に在住する中国家庭においては、子どもの最終学歴の取

日本に在住する中国人家庭の養育の特徴

得国として日本を希望していても、それによって日本人家庭の考え方を積極的に取り入れることにつながるわけではないと考えられる。

次に、日本に在住する中国人家庭の養育の特徴を明らかにするために、養育態度、しつけ観・子ども観、子どもの将来の期待それぞれについて、中国本土の家庭、日本人家庭との比較を行った。

養育態度については、「(A)日本に在住する中国人家庭」、「(B)中国本土の家庭」、「(C)日本人家庭」の3群の「寄り添い型養育態度」と「保護型養育態度」のどちらにおいても有意な違いは示されなかった。先行研究(許, 1999)では、子どもを甘やかすことについては、中国のほうが日本より高いことが示されている。このような先行研究との違いが見られた理由として、2015年から中国は「二人っ子」政策を取っており、本研究の対象でも日本に在住する中国人家庭の57.1%、中国人家庭の32.1%は2人以上の子どもを持っていたことが挙げられるだろう。「二人っ子」政策により、中国は日本と同様に2人以上の子どもがいることが当たり前になってきているため、母親の養育態度も1人っ子の子どもを甘やかすのではなく、日本の養育の特徴に近いものになってきている可能性が考えられる。実際に、本研究の対象において1人っ子の家庭と2人以上の子どもの家庭の養育について比較してみたところ、

「(A)日本に在住する中国人家庭」において、一人っ子の家庭の母親 ($M=10.22, SD=2.54$) は2人以上の子どもをもつ家庭の母親 ($M=8.94, SD=2.34$) より、有意ではないが「保護型養育態度」の傾向が高いことも示されていた ($t=-1.92, p<.10$)。

3群の母親のしつけ観・子ども観については、「権威的しつけ観」において、Table6に示したように、「(A)日本に在住する中国人家庭」と「(C)日本人家庭」はどちらも「(B)中国本土の家庭」より低いことが示され、日本に在住することで権威的しつけに対する考え方が日本人に近いものに変化した可能性が示唆される。日本に在住する中国人家庭と中国本土の家庭の養育を比較した先行研究

(林, 2012)では、日本に在住する中国人家庭の母親と中国本土の家庭の母親の間では「権威的しつけ観」に有意差が示されていないが、最近中国では「教育の国際化」(三友, 2018)と呼ばれる海外の教育理念を取り入れようとする社会的変化があり、その影響が表れた可能性が考えられる。また、本研究の対象は、1年以内の一時帰国の日

数が「30日未満」の母親が半数以上を占めていたことから、中国に帰国する日数の少なさが日本の教育理念を受け入れやすかった可能性も考えられるだろう。母親の帰国日数による「権威的しつけ観」の違いについて調べたところ、「30日未満」の母親は「30日以上」の母親よりも「権威的しつけ観」が有意ではないが低い傾向が示された ($t=1.79, p<.10$)。帰国日数が長いことは中国に住む家族や友人の子育てに関する考え方やアドバイスに触れる機会が増えることともつながるので、このような違いが生じたのかもしれない。

子どもの将来への期待については、Table7に示したように、「大人になった時の期待」について3群を比較したところ、「(A)日本に在住する中国人家庭」と「(B)中国本土の家庭」はどちらも「(C)日本人家庭」より、「お年寄りを大事にする」、「親孝行をする」、「貧しい人や困った人に尽くす」、「仕事より家庭を大切にすることへの期待が高いことが示された。中国には、「尊老愛幼」(老人を尊重し、子どもを愛する)、「乐于助人」(喜んで人を助ける)、「家和万事兴」(家和して万事成)という伝統的な価値観が存在している。本研究の結果から、たとえ日本に在住していたとしても、家族を大切にするといった“生き方”に対する中国の伝統的な価値観は変化しにくいものである可能性が示唆される。一方、「(A)日本に在住する中国人家庭」と「(C)日本人家庭」はどちらも「(B)中国本土の家庭」より、「国のために尽くす」ことへの期待が低いことが示された。中国では幼児教育における「幼稚園教育指導綱要」の中で「国を愛する」という目標を掲げているなど、幼いころから愛国主義を育てる教育を行っている。しかし、日本に在住する中国人家庭は中国本土で子どもの教育を行っていないことから、“国のため尽くす”という考え方を子どもに持たせる意識が低くなっている可能性が考えられる。日本では中国のような愛国主義教育を行っていないため、結果的に日本人家庭と同程度の低さとなったのかもしれない。

さらに本研究では、子どもの学歴に対する期待についても3群の比較を行った。その結果、Figure1に示したように、「(A)日本に在住する中国人家庭」と「(B)中国本土の家庭」はどちらも「(C)日本人家庭」より大学院卒以上の高い学歴を子どもに期待していることが示された。これは、先行研究(ベネッセ教育研究所, 2018)と一致する結果であり、さらに「(B)中国本土の家庭」では、母親自身の学歴が高い方が

日本に在住する中国人家庭の養育の特徴

子どもに高学歴を期待することも示された。現代の中国社会においては、もともとあった学歴重視の考え方に加えて、高等教育の普及により大学卒の学歴を持つ人が増加していることから、大学卒よりも大学院卒の方が就職において優遇され、有利な立場に立てるといふ現状がある。そのため、特に母親自身が高学歴の場合には子どもに大学院卒を期待する特徴があるが、日本に在住する中国人家庭においても、中国本土の家庭と同様に子どもに立身出世を期待する価値観を維持していることが示唆される。

結論

中国本土の家庭、日本人家庭との比較の結果、日本に在住する中国人家庭は中国の伝統的な価値観である人を大切にすることや立身出世といったことを中国本土の家庭と同様に子どもに期待しているのに対して、権威を重視することへの期待は、日本人と同程度まで低くなっていることが示唆された。そして、このような違いは、将来子どもに日本で最終学歴を取得したり、就職したりすることを望んでいるかどうかには関係がなかった。また、養育態度については、中国人家庭と日本人家庭の間でそもそも違いが見られなくなっていることが示唆された。

しかし、本研究の対象となった3つの群はそれぞれ都市部に居住しており、人数も50名程度ずつと限られたものであった。中国と日本の文化がどのように日本に在住する中国人家庭の養育に影響を与えるのかをより詳細に明らかにしていくためには、今後もより多くの幅広い対象を用いて、日本に在住する中国人家庭、中国本土の家庭、日本人家庭の養育を比較する研究を積み重ねていく必要があるだろう。

謝辞

本研究は、2020年3月に横浜国立大学教育学研究科に提出した修士論文の一部を修正・加筆したものです。調査にご協力いただきましたお母様、保育園関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

引用文献

ベネッセ教育研究所 2018 幼児期の家庭教育国際調査
法務省 2019 平成30年末現在における在留外国人数について
教育部办公厅 2001 幼儿园教育指导纲要（试行）

川崎千恵・麻原きよみ 2012 在日中国人女性の異文化における育児経験：困難と対処のプロセス 日本看護科学会誌 32(4) pp52-62
李剣・木村留美子・津田朗子 2015 在日中国人母親の子育てとその家族からの支援の特徴に関する研究 金沢大学つるま保健学会誌 39(1) pp109-117
林香花 2012 日本に在住する中国人家庭の育児に関する調査：中国本土の家庭との比較 横浜国立大学教育学研究科生活システム系教育専攻修士論文
羅蓮萍 2006 中国と日本における親子関係の発達的变化 山口大学大学院東アジア研究(5) pp55-66
三友陽子 2018 中国における「教育の国際化」の語られ方 芸国語国文学(48) pp170-180
文部科学省 2019 外国人児童生徒受入れの手引き 第1章 外国人児童生徒等の多様性への対応 pp4-11
労働政策研究・研修機構 2016 「一人っ子政策」撤廃の影響
清水嘉子 2002 在日韓国・中国・ブラジル人の母親の育児ストレス：日本の母親との比較から 母性衛生 43(4) pp530-540
田中敏明・照屋博行 1998 日本、中国、韓国の子どもの生活と子どもを持つ親の育児：幼児と小学校5年生を持つ親を対象にした実態調査 少子化時代における子どもの生活、文化、環境に関する日中間比較分析的研究（韓国、台湾を含む） pp1-22
吳燕和 1995 華人父母的权威观念与行为：海内外华人家庭教育之比较研究 中国人的观念与行为 pp339-350
許佳美 1995 母親の育児態度と子どもの発達：中日比較調査 臨床教育心理学研究 21(1) pp147-158
許佳美 1999 幼児の「心の理論」の発達ときょうだい数及び母親の養育態度との関係：中・日比較調査 京都大学大学院教育学研究科紀要(45) pp136-148
楊文潔・江守陽子 2010 在日中国人母親の育児ストレスに関する研究 日本プライマリ・ケア連合学会誌 33(2) pp101-109
中国国家统计局 2019年08月22日 “人口总量平稳增长 人口素质显著提升——新中国成立70周年经济社会发展成就系列报告之二十”
http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/201908/t20190822_1692898.html 2020年8月24日閲覧
YNU Repository Advanced published date: November 10, 2020